

5月21日、政策秘書課職員との話です。

5月16日、モリコロパークで行われた社会福祉法人日本介助犬協会主催「介助犬フェスタ2015」のオープニングセレモニーで次のようなあいさつをさせていただきました。



市内にある介助犬総合訓練センター「シンシアの丘」に見学を訪れた際に、教えていただいたことが2つあります。

1つめは、ほめることの大切さです。

介助犬は、ほめて育てると伺いました。上手にできたときは、「すごいね」と言って、拍手をしてほめる。失敗したときは、叱るのではなく、知らないふりをするそうです。

2つめは、自分の役割を楽しむことです。

介助犬は、決して、やらされている、働いている、仕事をしているのではなく、ほめられることがうれしくて、楽しんでいるそうです。

人間の社会では、「こうしちゃダメ」「勉強しなくちゃダメ」などと、ダメなところばかりを責め、ほめることが少なくなっているように思います。

シンシアの丘から、「ほめることの大切さ」を長久手市全体に、そして日本中に広めていければと思います。

介助犬フェスタの後、児童館まつりの会場に顔を出しました。そこでボランティアをしていた女性が、私にこんなことを言われました。

「私は、自分の子育ての反省から、孫はできる限りほめて育てたいと思っています。子育て中の親は、ほめて育てることが良いと頭で分かっているけど、正直、難しいものです。5%の良いところと、5%の悪いところがあれば、5%の悪いところばかりに目が行ってしまい、そこを責めてしまう。子ども達は、大切な存在です。良いところを伸ばしてあげたい。次世代を育てていくのが市長の仕事だと思います。市長さん、今の長久手で大丈夫ですか？」

偶然に驚きました。この女性は、介助犬フェスタでの私のあいさつの内容をご存知ではありません。「ちょうど、今、そういう内容の話をしてきたところですよ」とお話し

させていただきました。

横浜市で、高校生が母親と祖母を刺殺する悲しい事件がありました。動機として「日頃から2人に勉強のことを注意され、イライラしていた」と報道されています。軽率なことは言えませんが、母親と祖母がそれぞれ違うモノサシ（＝価値観）を持ち、どちらか一方が、彼のことを勉強以外のことでほめていれば、この高校生は救われたかもしれません。

ほめることは、難しいことです。私たちは、相手の良いところを見つける努力が足りないのかもしれませんが。毎日の生活の中で努力を重ね、自然にできるようにしていきたいものです。みんなが「ほめることの大切さ」に気付き、少しずつでも変わっていけば、長久手は、日本は変わっていくと思います。

～市長の話を聞いて～

昨年度、職員研修の一つに「ほめ達（ほめる達人）」がありました。「ほめ達」は、相手の良いところ探しです。具体的にほめるのが難しければ、「すごい」「さすが」と言うだけでもいいそうです。むやみやたらに、この言葉を連発すれば胡散臭くなりますが、やっぱり「すごいね」と言われて、悪い気はしないものです。職員同士が「ほめ達」を意識し始めて、職場の雰囲気少し明るくなったような気がします。

以前に本で「脳は主語を理解できないので、悪いことを言うと、すべて自分のことだと認識してしまう。だから人の悪口は言わない方がいい」と読んだことがあります。本当にそうであれば、人をほめれば、自分自身をほめることになります。一石二鳥です。

そう分かっても、私は、やっぱり相手の悪いところばかりが目につけてしまいます。ほめる＝相手の良いところ探しは、つくづく日々の心の持ち様、日々努力だと思います。

長久手市では、今年4月から「長久手『いいね』賞」というものを始めました。これは、市民を元気づけてくれた者や地道な活動を通じて社会貢献している方などを顕彰し、市民同士が褒め、互いを認め合うことで幸福度アップを図ろうというものです。みなさんの周りに、誰に頼まれたわけでもないのにごみ拾いを続けている人や、子ども達の見守り活動を行っている人など、「あの人が続けていること、みんなに知ってほしい！」という事例はありませんか？ぜひ、推薦をお願いします。詳しくは、政策秘書課までお問い合わせください。